

郁文館高等学校 一般試験
(2月10日)

国語

時間50分・100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入すること。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入すること。
記入方法を誤ると得点にならない。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも回収される。

郁文館高等学校

□ 次の文章を読んで後の問いに答えよ。

日本がアメリカとの戦争に敗れたのが一九四五年で、以後、アメリカ軍占領中のアメリカ民主主義の時代、戦後の復興と、それにつづく高度経済成長の時代を経て、日本はたしかに物質的にはゆたかな国になったが、①その代償に多くの過去の徳を失った。

一九四五年以前は日常の徳目として生きていた言葉で、今はもう死語となったものは数えきれない。わたしがいま思いつくままを挙げてみても、我慢、辛抱、克己、自制、節制、けじめ、規律、服従、(注1) 恭儉、忍耐、行儀 a サホウなどがすぐ浮かぶが、こういう言葉が死語化したのは、むしろその実体が失われたからである。

戦後教育のある時期、こういうような徳目は非民主的で、封建社会の遺物だからよくないといった思潮が、教育界をはじめ世間の論調を②風靡していた時代があった。人は欲望を我慢する必要はなく、親は子の欲望をすぐ叶えてやるがいい。規則、規律でしばって服従させるのは強制的で、子供は自由放任するがいい。そういった自由の誤解にもとづく誤った民主主義的 b ヘンケンが横行し、子供はいかなる原則をも持たずひたすら③野放図に育てられた。その結果が現在の教育の崩壊の現場である。

「努力」という言葉も、そういう一連の誤った民主主義によって、なにやら悪徳のごとく嫌われた徳目の一つであった。が、いうまでもなく④こんなバカげた話はないのであって、人は人として生まれただけで人間になるのではない。目標を立て、それを実現しようとする努力することによって初めて、人間としての特質を身につけてゆくのだ。人として社会に生きてゆく上で必要なさまざまな徳目は、意識して自覚的に学習しなければ身につかない。わたしのドイツ人の友人は、「努力なくして人生なし」というのが口癖だったが、まさにそのとおりで、努力しないで人間になった者はいないのだ。だから露伴は『努力論』を説くに当たってその c ポウトウにまずこう言っている。

人はややもすれば努力の無功に終わることを訴えて(注2)嗟歎するもある。然れど努力は功のありと無とによって、これを敢えてすべきや否やを判すべきではない。努力ということが人の進んで止むことを知らぬ性の本然であるから努力すべきなのである。

努力がそれに値する成果をもたらすかどうかの問題ではない。目標をたてそれに近づこうと努めること、それ自体が人間の本性なのだ、と露伴は言う。これはわたしの経験からしてもそのとおりで、努力を好まない人というのはたしかにいたが、⑤そういう人はついに人生が最初に偶然与えてくれた境界を超えることはなかった。

露伴は努力には二つあって、一つは直接の努力、一つは間接の努力だという。「間接の努力は(A)の努力で、基礎となり源泉となるものである。直接の努力は(B)の努力で、(注3)尽心竭力の時のそれである」。そしていうまでもなく、何かの折に一つの目的を立て、じかにその実現に向かって努力しても、必ずしも成功するとは限らない。どんなことでもその道のふだんの努力あってこそ、何かの折にあることが成就するのだ。

— 中略 —

何事だつてそうだろう。ふだんのこういう基礎的な努力があつて初めて、いざという時の成就がある。ふだん何の努力もしないでいて、一回限りの成功を狙つても無駄だ。わたしは碁が好きで、d シロウトでは比較的強い方とうぬぼれているが、そんな遊び事だつてふだんの努力があればこそなのである。新聞の(注4)総譜を切りとつておいて毎日碁盤の上にならぶことを e オコタらない。初めは一局並べるのに一時間もかかったりするが、次第に熟達し、慣れれば二、三十分で一局を並べられるようになる。しまいには一局何百手かを全部暗記するにいたる。そうやってプロの着手がどこへ行くかを学ぶのだ。こういう努力もしないで、大会の時だけ出てきて頑張つても好成绩を収められるわけがないのである。

そこで露伴はこう言う。

努力して居る、もしくは努力せんとして居る、ということ忘れて居て、そして我が為せることがおのずからなる努力であって欲しい。そうあつたらそれは努力の(注5)真諦であり、醍醐味である。

努力しているという意識もなしにひとりでに努力している、それが本物だというのだ。露伴は、その境地までゆくには愛か捨かを体得しなければならぬとも言っているが、(C)で、そのことが愛にまでいたれば、⑥努力しているなどと意識せずとも自然とそれに励むようになるのである。

(中野孝次『自分を活かすリ気リの思想』より。出題の都合上改編・省略した箇所がある)

(注1) 恭儉(きょうけん)：人に対してうやうやしく、自分の行いは慎み深いこと。

(注2) 嗟歎(さたん)：嘆き悲しむこと。

(注3) 尽心竭力(じんしんけつりよく)：心を尽くし、力を尽くすこと。

(注4) 総譜：碁や将棋で対局で打たれた手順を記録したもの。棋譜のこと。

(注5) 真諦(しんたい)：物事・思想の根本義。原理。本義。仏教語で、絶対不変な究極的な真理のこと。

問一 線部 a s e のカタカナを漢字に直せ。ただし、楷書で書くこと。

問二 線部の「露伴」は明治から昭和にかけて活躍した小説家幸田露伴のことである。露伴の作品を次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 草枕 イ 戯作三昧 ウ 巾着・セクスアリス エ 五重塔 オ 金色夜叉

問三 () 空欄 A・B に当てはまる語を次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア A 他者 B 自己 イ A 無駄 B 毎日

ウ A 準備 B 当面 エ A 原因 B 結果

問四 () 空欄 C にあてはまることわざとして最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 好きこそ物の上手なれ

イ 他山の石

ウ 石橋をたたいて渡る

エ 縁の下の力持ち

問五 線部①「その代償に多くの過去の徳を失った」とあるが、このことが、どのような状態につながっていると筆者は述べているか。その状態を具体的に示す語句を文中から八字で探し、書き抜け。

問六 線部②「風靡し」とあるが、本文における意味として、最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 強く支配する

イ 広く普及する

ウ 完全否定する

エ 不明瞭化する

問七 線部③「野放図」とあるが、本文における意味として、最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 非常に厳しいさま
イ あつかましいさま
ウ 愛情を注がれないさま
エ ほったらかしのさま

問八 線部④「こんなバカげた話」とあるが、筆者はどのようなことを「バカげた」と思っているのか。二十五字以内で答えよ。

問九 線部⑤「そういう人はついに人生が最初に偶然与えてくれた境界を超えることはなかった」とはどういうことか。「そういう」の内容を明確にして、五十字以内で答えよ。

問十 線部⑥「努力しているなどと意識せずとも自然とそれに励むようになる」とあるが、「それ」を示す語句を露伴の言葉の中から十七字でさがし、書き抜け。

□ 次の文章は、森谷明子の小説『南風吹く』の一節である。離島に住む高校生の航太は俳句甲子園という大会に出場するために、メンバー集めに悪戦苦闘していた。ついにメンバーがそろい準備を始めたところ、祖母が倒れたという電話を受けた。以下はその後に続く場面である。これを読んで後の問いに答えよ。

今までも海が嫌いになり始めていたところだった。だが、①こんなに憎いと思ったのは初めてだ。何度も親父に電話をかけて、ようやく話ができたのは本土へ渡るフェリーを待っている時だった。

——ばあちゃん、今手術室に入った。心臓に近い血管が詰まったから、血管の中に管を通して、その詰まりを取るそうだ。カテーテル手術というらしい。

「この前、親父が説明してくれた手術か」

——ああ、そうだ。先生たちは、そんなに難しい手術じゃないと言ってくれている。だから、航太、あわてて駆けつけようとして怪我なんかするな。病院の場所はわかるな？

X 「うん」
通話を終えてからも、航太はしばらくスマートフォンを握りしめていた。

「……海さえなければ、ばあちゃんは入院を承知していたかもしれない。そうしたら、もっと早く、軽いうちに手術を受けられていたんだ」

Y 「うん」
ベンチの隣にだらしないう恵一が、相槌を打つ。

Z 「こんなに、血のaカタマリが**大きくなる**前にさ。だけど、ばあちゃんは島を離れるのを嫌がった」

——島で生まれて島で死んでいくんだから。そう言い張るばあちゃんを、親父も航太も説得し切れなかったのだ。

「おれのおふくろだって、そうだ。急に頭が痛いってしゃがみ込んで、病院に駆け込んで救急艇で運んでもらっているうちに……」

「くも膜下出血、だったよな、お母さん」

「そう。きっと、救急車ですんなり運んでもらえるようなところに住んでいたら……」
ようやく、フェリーの汽笛が聞こえてきた。そのどかな音さえ、今は腹立たしい。

「じゃあな」

立ち上がる航太に、恵一は乗船口までついてきてくれた。

「うちの親父が家にいたら、フェリーなんか待たずにすんだよな。船を出せて掛合せただけ。でもまだ漁から戻ってないんだ。悪い」

「いいんだよ」

一人でフェリーに乗り込んだものの、座席に落ち着いている気にはなれず、航太はずっとデッキの手すりをつかんだまま、街の灯が大きくなるのをにらみつけていた。

「……ぼくら水の壁に**b**へ**夕**てられてます」

ふと、そんな言葉が口について出る。

それが十七音であることに気づき、おかしくもないのに変な笑い声が漏れた。

病院の待合室は、島の古い病院でも本土の新しい病院でも、たいして変わらない。c 殺風景で、くつろげるような場所ではない。置かれているベンチも固くてすわり心地が悪いし、さらに困ったことに座面が狭い。航太が腰を下ろすと腿の半分くらいが余ってしまったて、長くすわっているうちに疲れてくる。もぞもぞしながら少しでも楽な姿勢を探していると、隣の親父がふっと笑った。

「航太、また背が伸びたのか。脚が長い奴は大変だな、もてあますことになって」

そうか、自分の身長がこのベンチに合っていないのかと航太は納得し、次に、親父はもてあましていないことに軽くショックを受けた。

航太がこの病院に駆けつけてきた時、ばあちゃんはすでに手術を受けていて、親父一人がその手術室のドアの前をうろろしていた。その親父をこのベンチに引つ張ってきて、こうして二人ですわっているわけだが、たしかに、ちんまりとベンチに収まっている親父はジャストサイズに見える。

A ばあちゃんを飲み込んだという手術室のドアが開いたのは、それからまもなくだった。

「ばあちゃん？」

航太がそつと呼んでも、ばあちゃんの反応はない。

顔が真っ白で、固く目を閉じている。でも、毛布の下ではちゃんと胸が動いているのがわかった。

航太はため息のような声を漏らし、壁に寄りかかる。

よかった。ばあちゃん、生きています。

執刀してくれた先生が、親父に向かってきてきぱきと説明をしてくれているようだが、その声はろくに②耳に入らなかった。

ばあちゃん、生きています。

今になって震えてきた脚を鎮めようと、航太は口の中でそう繰り返した。

ばあちゃんは特別室に運ばれていった。今夜は、そばにつきdソつたりはできないらしい。

「お年がお年ですからね、用心しましょう」

そう説明する先生に親父と何度も頭を下げてから、ようやく二人とももの考える余裕ができた。

「さて……、これからどうするか」

すでに夕方という時刻だ。

「店のことも心配なんだが……」

二人で外に出てから、航太はスマホのスイッチを入れる。すると、知らない番号から着信が入っていた。誰だかわからないその電話は後回しにして、メールを確認する。四件。一件は日向子からのお見舞いと部活のスケジュールの知らせ。和彦からもお見舞い。あとの二件は恵一からだった。

——今晚、親父さんとうするんだ？ 島に帰って来られないんじゃないか？ よかったら、この間行った、おれの卓おじさんの店に連絡してみちゃどうだ？ 航太と親父さんの二人くらい、泊まれるぞ。おじさんの連絡先、教えとく。

③ 一時間ほどあとに、さらにもう一件入っていた。

——航太に断らないうちに悪かったかもしれないけど、航太の電話番号を卓おじさんに知らせた。おじさん、悪い人じゃないからそれだけは信用してくれ。おじさんから連絡あるかも。eエンリョしないで相談したほうがいいと思う。おじさん独身だし、気兼ねはいらないって言ってるからさ。

そこに書かれている電話番号に見覚えがあった。さつきかけてきた相手だ。あれは、恵一のおじさんの卓さんだったのか。

航太はそれらの画面を親父に見せて、ざっと説明する。

「今晚泊まる場所か……」

「うん。恵一のおじさんが松山で酒屋をやってるんだ。恵一のお父さんの弟、だったかな」

親父は腕を組んで考え込んだ。

「実は、明日は上生菓子の注文が入っているんだ。もう、豆の下ごしらえもすんでいる」

「じゃあ……」

和菓子屋の朝は早い。今晚、本土で過ごして朝一番のフェリーで島に帰っても、親父が菓子を作る時間がない。小市堂の菓子を待っている人がいるのだ。そのお客さんのために、プロなら、ちゃんと仕事をするのが当然だ。

それに対して、航太は明日、テスト明けの自由登校の日だ。五木分校では慣例として、もう授業がない。休んでもそんなに困らないのだ。

親父はやがて、決心したように顔を上げた。

「航太、この村上さんのところに一晩泊めてもらえ。これから一緒に行って、おれも頼む。だから今晚ばあちゃんに何かあったら、航太、頼むぞ。やつぱり、今はすぐに病院に駆けつけられる場所に誰かいたほうがいい」

そうだ。これからしばらくは、親父と協力してばあちゃんを見守らなければならない。そして親父は小市堂を守らなくてはいけない。B どんなに少ないにしても、親父が作る菓子を楽しみにしている お客さんがいるのだ。あんなに小さい島なのに、上質の菓子を喜んでくれる舌を持った人たちが。

だったら、航太が、親父の代わりにばあちゃんについていなければ。

おろおろしている場合ではないのだ。本音を言えば、心細い。これからどうなってしまうのか。

——それでも大丈夫。とにかく、ばあちゃんは生きているんだから。

航太は④呪文のようにそう繰り返してから、卓さんに電話をかけた。

問一 線部 a ~ e の漢字は読みを書き、カタカナは漢字に直せ。

問二 線部 A、B で使われている修辞技法をそれぞれ答えよ。

問三 X、Y、Z の「うん」とあるが、一つだけ他と異なるものがある。記号で答えよ。

問四 線部①「こんなに憎いと思ったのは初めてだ」とあるが、なぜか。その理由を六十字以内で答えよ。

問五 空欄に入る航太の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア さきほどの十七音、変だったな。

イ 親父、すわり心地が良さそうじゃん。

ウ 親父、こんなに小さかったっけ。

エ ばあちゃん、無事で本当に良かった。

問六 線部②「耳に入らなかつた」とあるが、この時の航太の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア ばあちゃんが生きていることに安心して、生かしてくれた医師が目に入らないから。
- イ ばあちゃんが元気になったことに安堵して、医師の説明は不要だと感じていたから。
- ウ ばあちゃんの症状への説明が高度すぎて、自分には理解の難しいものだったから。
- エ ばあちゃんが生きていることに安心して、それ以外のことが考えられないから。

問七 線部③「一時間ほどあとに、さらにもう一件入っていた」とあるが、この「一時間」における恵一の変化として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア おじさん家に泊まる話を勝手に進めてしまったため、良かれと思ってやったことを謝罪しなければいけないと思うようになった。
- イ 誘うだけでは航太がエンリョして島に帰ると思ったため、おじさんの家に泊まらざるを得ない状況を作ろうと思うようになった。
- ウ おじさんから航太親子の宿泊の提案を受けたため、何としてでも泊まってもらう必要が出てきてしまったと思うようになった。
- エ 父親の漁が思っていたよりも長引いてしまったため、それを見破られないようにごまかさなければならぬと思うようになった。

問八 線部④「呪文のようにそう繰り返して」とあるが、その時の航太の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 不安が募る中で、一命をとりとめたばあちゃんのためにも自分がしっかりしなければと、自分に言い聞かせている。
- イ 父のいない心細さの中で、ばあちゃんはそばにいて助けてくれると自分に言い聞かせて、不安を取り除こうとしている。
- ウ 父は本土にいるお客さんのために、自分はそんな父のためにもばあちゃんのをそばにいようと気持ちを固めている。
- エ 父は菓子を待つかお客さんのために、自分はばあちゃんのために、しっかり生きなければならぬと自分に言い聞かせている。

問題は、このページで終わりである。

